

松村光秀の生涯と芸術 —絵画作品を中心に—

Life and Works of Koshu Matsumura:
a Study on his Paintings

渡 邊 亮 平
WATANABE Ryohei

Koshu Matsumura was born in Kyoto in 1937. Matsumura, who started as a painter, later made sculptures. Since he grew up in a poor family and started working soon after graduating from junior high school, he could not receive professional education of art. Nevertheless, he was able to create original works with a very unique idea. Less is known on his vitae, and he himself didn't talk a lot about his life and works. In this paper I will discuss Matsumura's life and works, examining what can be confirmed at this moment. I believe that many suggestions can be revealed from his works, re-evaluating the artist Koshu Matsumura once again.

はじめに

松村光秀（1937-2012）（図1）という画家・彫刻家は現在、一部の人々には知られているもののそれほど多くの人々に認知されているわけではない。しかし、その作品は一度その作品世界に浸った者にある種の異様な感慨を催さずにはいない。冴えた描写と独特の絵画世界は油画であるのに東洋画というほうが落ち着きがいいようにも思われる [1]。松村の名がそこまで多くの人々に知られることのなかった理由としては様々な要素が考えられるが、一つには松村は専門的な美術教育を受けた美術大学出身者ではなかったことが挙げられるだろう。また特定の師を持つこともなかった。松村は専門的な美術大学などの教育機関で美術教育を受けず、基礎的なものは看板屋竹松画房で働いていたときに学んだ。しかし、それ故にこそ、制作にたいして自由な発想をもつことができたと思われる。松村の生涯にはまだまだ不明な点も多い。また、松村自身は作品や制作に対して多くのことを語ってはいない。松村作品のコレクターであった三浦徹が展覧会ででのやり取りとして、「わかりますか」と聞く松村に対して「わかります」と答えるといった非常に漠然とした会話を明かしているように、作品に対峙して観る側に解釈がゆだねられているともいえると同時に、安易に理解されることを拒絶しているともいえる [2]。苦勞の絶えなかった少年時代と幸せな結婚生活、そしてそこから奈落へ突き落とされるような事故に遭遇しても、松村は常に作品を作り続けた。後半生の松村に寄り添いつづけたギャラリスト・島田誠は松村を「現代の絵師」と評している [3]。抜群の描写力と構成はまさに「現代の絵師」といえるであろう。また、松村には彫刻家としての顔もあった。

1980年代後半から松村は木彫作品をつくりはじめ、90年代にはいと本格的に木彫作品を発表していく。松村の作品を観ると得体のしれない不思議な感情を抱いてしまう。まるで観る人のことを考えてはいないようにも思えば、どこまでも人間の滑稽さや業を肯定し包み込んでいるようにも思われる。松村光秀という作家はどのような人生を歩み、作品を生み出していったのであろうか。松村の生涯と作品を追っていきながら松村光秀という稀代の作家にもういちど光をあてていきたい。

1. 松村光秀の生涯と作品

生い立ち (1937 ~ 1963)

松村光秀は1937年10月2日、京都市中京区壬生下溝町に在日二世として生まれた。父親の李義男と母親の河貞順はともに韓国人であり、結婚後すぐに馬山市からやってきた。そのため松村の本名は李光秀（イ・カンス）という。幼いころの松村の家庭は、非常に荒れていた[4]。父親が別に女性をつくっていたことなどもあり、父親が母親を殴り母親が家出を繰り返すような家庭であり、貧乏であった。そのような状況に耐えかね、1943年に母親は韓国へと帰っていく。その後母親に会うことはなく1946年、松村が9歳のときに母親は31歳の若さで死去する。そして、父親は全貴岳（ゼン・キガク）という女性と再婚する。中学卒業後は父親の仕事を手伝い始めたが、新しい母親との折り合いの悪かった松村は、家を出て下宿を始めた。その後中学校の教師の紹介で看板屋、竹松画房で働き始める。竹松画房は京都で上映される映画の看板のほとんどを描いていたという[5]。働き始めて6年ほどして松村は看板の絵を任されはじめる。また、花や京都・奈良の風景を絵に描いて絵具屋へ売りに行くとよく売れたという[6]。1961年に出品した絵が「京展」へ入選し、1962年に竹松画房を辞め画家で生きていくこととする。

後年松村は、自身の少年時代を「身内のことでよいことはなくて、一時は親から捨てられた状態のときもあった」と語っている[7]。松村の作品に観られる女性へのまなざしは、殴られ泣いている母親の姿を見た少年の松村のまなざしともいえる。この竹松画房での作業が画家としての修業期間となり、松村の作品の技術的なベースになったといえるだろう[8]。なお、展覧会のDMなどには出生年を1936年と表記されているものがあるが、1999年以降のものは1937年となっているため本論では1937年出生としてすすめていく[9]。光秀（こうしゅう）という音読も1965年の朝日会館ホールでの個展ではMitsuhide Matsumuraとふられているところから両方の読みを使っていた時期があり、1989年頃に光秀（こうしゅう）に統一している[10]。

画家としての出発 (1963 ~ 1979)

1962年に竹松画房を辞めた松村は翌年の1963年に初個展を開催する[11]。当時の作品のモチーフはヒトやトリであったと思われる[12]。1964年27歳のときに父親同士が知り合いであった縁で西原賢子と結婚する。後述の火事により松村の1979年以前の作品は数少ないが、1962年の「京都アンデパンダン展」に出品した作品のタイトル、《欲望》、《絶望》や1963年の「京都アンデパンダン展」に出品の、《『オリ』と鳥》、《『オリ』の鳥》などから鬱屈した若き日の松村の心

情が感じられる。しかし、1965年の「京展」に出品された作品のタイトル、《小世界》、《小さな世界》、《木馬の世界》からはささやかな幸せを感じさせる。1964年の結婚を機に松村のなかで「絶望」や「オリの中」から新しい世界へと向かって変化していったように思われる。1966年の都雅画廊での個展については、『京都新聞』に「淡いムードをたたえた作品だ。羽ばたくトリの群れ―それもリアルな写実描写ではなく、トリたちの動作を心象的に表現している。動感をあらわそうとするあまりに、画面がムードに流れたり、密度の甘さが気になる。これら大作に比べると「浮く」「かごの鳥」「はばたき」「独」など小品のほうが楽しい。持ち味の心象的な抒情性を、もっと明確な構成力でひきしめてほしい。二科会所属の画家で、個展は初めて。(四条花見小路西入ル、都雅画廊)」という批評が載っている[13]。また、1967年には長男・秀志が、1969年に長女・志奈子、1972年に双子の女儿、維志子・総志子が生まれる。松村にとって非常に幸せな時期で家族を溺愛した[14]。1965年・1966年と個展を開催するがその後1977年まで個展は開催することがなかった。「二科展」の他には、1962年～1965年までは「京都アンデパンダン展」に出品し、1961年～1962年・1964・1974年に「京展」へ出品、1975年からは「京都美術懇話会」など美術団体での発表を主体としている時期である[15]。また1972年には二科会の会友に推挙されている[16]。

松村の初期の作品の相貌をうかがわせるものに《海辺の記録》(1970年)(図2)というものがある。《身勢打鈴(シンセタリヨン)》シリーズに移行していく数年前に制作されたこの小品は、力なく曲げられた左手と貝殻や海星そして歪んだ時計の文字盤、背後には波打つ浜辺が描かれている。同時期の1970年の『京都新聞』のカット絵(図3)を観ると同じように曲げられた手や歪んだ時計の文字盤が観られる。描写自体は非常に冴えているものの、《身勢打鈴》シリーズに観られるような迫力はなく、画家松村が自身の制作の方向性を模索しているさまが浮かび上がっている。1970年の『京都新聞』のカット絵(図3)と1976年の『京都新聞』のカット絵(図4)を比べるとそこに松村が画家としてどのような方向へ舵をきっていったのかということが浮かび上がってくる。初期の松村の作品で最も中心的な位置にあるものが《身勢打鈴》と名付けられた一連の作品群である。1970年代前半からスタートしたこのシリーズは1979年頃まで続けられた。1972年に小説家・李恢成が『砧をうつ女』で芥川賞を受賞する[17]。この小説から松村は「身勢打鈴」という言葉を使い始めたと思われる[18]。くしくも『砧をうつ女』の主人公の少年が母親を亡くした年齢9歳は、松村が母親を亡くした年齢と同じであった。この『砧をうつ女』に自身の母親や出自を投影していたのであろう。この小説のなかで、主人公の母について膝を打ちながら祖母が生い立ちを語る箇所「身勢打鈴(シンセタリヨン)」という言葉が登場し、「身勢打鈴(シンセタリヨン)(身の上話。節をつけて語る)であるとは後で知ったことである。僕は今でもその韻律を口ずさむことができる。なんとまあ哀しい鎮魂歌だ。草笛が流れていくような淋しさだ。しかし、それでいて韻律には大河の流れのような格調、黄楊がなびくような優しさが、叩きつけてくる怒りや怨念と混じっていて、どんな名手の楽譜にもない調べを紡ぎ出しているのだった」と書かれている[19]。身勢打鈴という不思議な響きの言葉は、日本にはない朝鮮の文化であり、松村にとって父母の国の文化であると共に自身の血と土俗へと向かっていくキーワードとなったのではないだろうか。

しかしこのシリーズをよく観ていくとタイトルは同じであっても表現としては非常に変化している。初期の《身勢打鈴Ⅰ》(1973年)(図5)と後期の《身勢打鈴》(1977年頃)(図6)を比べてみると表現上の変化が顕著に観られる。このシリーズに関して評論家の小倉忠夫は「この《身勢打鈴(しんせいたりよん)》のシリーズは<身の上を嘆く>という意味だそうである。松村が、この主題にとりつかれてからモダンな洋風がうすれ、開き直ったような執念を立ちのぼらせつつ、血と土俗の原点に引き寄せられていったかのようだ。これら哀話の世界には共通して、運命に追いつめられた人間の身をよじるような訴えが、冴えた描写力をみせる男女のみごとな肉体と裏腹に、あの怨念こめた眼差しに生々しい。また男と女の性のしがらみ、様々な業のドラマが《身勢打鈴》シリーズには満ちあふれている」といっている[20]。また島田は「松村の初期代表作のシリーズは「身勢打鈴(シンセタリヨン)」で、わが身の不幸を嘆くという意味がある。(略)こうした若き日の家庭不和、父母の相克を真正面から取り上げたものだ。松村作品の底流にある女性への思いは、泣いている母への思慕から女性をいとおしむ気持ちへとつながっていった」といっている[21]。これら二人の解説により《身勢打鈴》の主要なモチーフは把握することができる。『砧をうつ女』の世界に自身とのつながりを感じ取った松村は、身勢打鈴という言葉を手掛かりに自身と自身の父母をテーマに人間の業についての世界を描きだしていく。

まず初期の《身勢打鈴Ⅰ》(図5)を観ていくとヒエロニムス・ボスの《快樂の園》の影響が非常に色濃く感じられる。これは岡泰正も「フランドルのヒーロニムス・ボスやドイツのショーンガウアー、クラナッハ、グリュネヴァルトといったアルプス以北の、まだ中世に足を浸していた画家たちの画面に流れている沈鬱とも見える表現主義的感覚である」と指摘している[22]。また、「こうした悪魔が用意した「快樂の園」に遊ぶ裸体の男女の重力を失ったようなめくるめく運動の渦と、松村氏が描く人物像の浮遊感とは、意外に根の部分でつながっているのではないだろうか。情欲のおもむくままに動く人間の虚飾を剥ぎとって呈示し、その姿態を直視させ、それを作者も、澄まして鑑賞している私たち自身も何のことはない同根のものだと悟らされる」ともいっている[23]。そして後期《身勢打鈴》(1977年頃)(図6)になると人物はより独特なものとなる。奇怪な人物は、丸みをおびたより東アジア的な風貌となっていく。そして小人たちも数を減らし、子供のようになる。そして画面の中の要素は整理され、徐々に限定されていく。初期の人物が笛などをもっていたことにたいして後期では笛と共に剣も登場するようになる。そして画面に文字が配置されるようになってくる。岡が「画面に描きこまれた文字や金地は舞台装置のように見えてくる」というように、画面の中に文字が描かれる[24]。この後松村は様々な作品に文字を装飾的な要素として描きこんでいく(図7)。この文字の使い方にも看板屋での技術が生かされているという[25]。この《身勢打鈴》シリーズは1979年頃まで続けられ、シリーズ内で新陳代謝し続けた。1973年には《身勢打鈴Ⅰ》が彫刻の森美術館に所蔵され、1976年にはギャラリー紅で個展を開催し、「第20回シュル美術賞」で三等を受賞する。また、「第61回二科展」で《身勢打鈴》が金賞を受賞する。翌年の1977年に東京のギャラリーヤエスでの個展、1978年に二科会の会員推挙、1979年には「第1回明日への具象展」に出品とまさに順風満帆であった[26]。

悲劇を超えて（1979～1990）

画家として、そして父としてまさに順調に生活をしていた松村を悲劇が襲う。1979年5月11日、自宅で眠っているとストーブから出火し、松村と長女・志奈子以外の家族4人を失った。ここから松村の贖罪のような後半生の画業が始まる。この火事によって自宅にあった作品もほとんどが焼失した。娘がいなければ後を追って死のうと思っていたが、娘のためになんとかおもいとどまったという[27]。そして、10歳の娘との父子生活が始まる。《身勢打鈴》シリーズでひたすら男と女の業の世界を描いてきた松村であったが以後、母と子そして残された者というもう一つの位相が表れてくる。その年の「二科展」に《折りづる》（1979年）を出品し、そして翌年の「関西二科展」に《なわ、とんで》（1780年）（図8）を出品する。これらはともに火事で失った妻と子供を描いたものである。火事で亡くなった家族を「救いたいという思い」で家族を描いた[28]。松村にとって妻、子供たちを描くことは「救う」ことでもあった。しかし、松村は絵のなかで子供たちと妻を描き続けるようになるが、これは単純に幸せな姿を描くという楽観的な行為ではなかった。《華渡》（1997年）（図9）では幸せそうな妻と三人の子供たちが、華をつみ花輪をかけて歩んでいる。楽しそうな表情とは裏腹に地面には黒煙が舞い、炎が纏わりついている。このような痛みとともに画家として松村は歩いていく。自身の傷の痛みに触れ続ける行為が、松村にとっての贖罪でありまた救いへの道でもあったのだろう。これは島田も『絵に生きる 絵を生きる 五人の作家の力』のなかで引用しているものであるが、《雪・柱・輝》（1997年）（図10）という作品に関して、窪島誠一郎が『私の母子像』のなかで「御高祖頭巾（おこそずきん）がほどけたのだろうか、母のかぶった白い布は、どこことなく死者の顔を覆う布のようにもみえるから、ことによるとこの母子は浄土から今蘇ったばかりの母子ではないかと思えてしまう」と書いている[29]。このように松村にとって母子を描いた作品は彼岸と此岸を行き来するような視点に立って制作されている。

70年代まではキャンバスに油彩か和紙にコンテなどで描いていたが、1985年の展覧会で銘打たれている「油彩による板絵」にみられるように基底材がキャンバスと共に板を多用するようになり、板を組み立て可動するような絵画作品を作り始めた。

1986年は松村にとって非常に大きな出会いのあった年であった。ギャラリー島田（当時は海文堂ギャラリー）のオーナー島田誠との出会いである。島田は松村の最も良き理解者の一人であり、最晩年に至るまで松村に寄り添いつづけた。松村は生涯に2冊の画集を出版している。ひとつは作品と略歴のみの自費出版の210×176mmの薄い冊子である。『身の表現』と題されたこの自費出版の画集は出版年が記載されていないものの、収録されている作品からおそらく1987年頃に出版されたと思われる。もう一つは島田によって1998年に企画・出版された『松村光秀作品集「姿」』という画集である[30]。松村は80年代後半からは木彫作品にも挑戦するようになり、90年代以降は並行して絵画と木彫そしてその両方を合わせたような作品を作りだしていく。1988年には二科展で会員努力賞を受賞するが、翌年の1989年には長らく所属していた二科会を木彫に専念したいと退会している[31]。

晩年へ (1990～2012)

90年代にはいと徐々に松村の表現は穏やかなになり、独自の境地へと達する。この間の消息については、1990年10月にギャラリー紅で開催された個展について雑誌『三彩』12月号の展評で「松村光秀（紅、10・16-28）が描く女性は、いかにも怪奇な雰囲気身をまとっている。殊更に奇をてらった表現を意図しているというふうでもなく、女性を描ききろうとする時に自ずと現れ出てくる作者自身の絵画的な資質なのだろうが、シュールな幻想を喚起させながらも、リアルな訴求性が強い。今回は、情念濃いおどろおどろしい怪奇な作調は幾分抑えられて、典雅とも見える落ち着いた情感が漂う女人像になっている。会場の正面には、近年始められた木彫の作品を中心に聖壇のように少女立像を一対配した構成もあったりで、女人像には祈りのような宗教的香気が漂っていたりもする。昨年見た自画像の印象も忘れ難く、近年の作調には精神的な内面の深さを女人像に反映させた新たな熟成の時至ると思わせるものがある」と書かれている [32]。

《仰ぐ》（1990年）（図11）という作品は上記の「宗教的香気」を感じさせる松村芸術の一つの白眉であると思われる。それは晩年の傑作《天地》、《涅槃横華像》（2002年）（図12）とも展示方法からみると繋がっていくと考えられる作品である。《天地》、《涅槃横華像》（2002年）（図12）は展示スペースのサイズから前後に配置されることになったといわれるが、組み合わせた作品としても観ることができる [33]。対してこの《仰ぐ》（1990年）（図11）は意図して始めから立体と絵画が組み合わせられている。中心には歪んで何かに押しつぶされそうな人物の木彫が置かれている。このメタモルフォーゼする人物は、まさに岡が指摘する「木が形を変えて人になる。あるいは人が形を変えて木になる、という造形に通じるもの」であろう [34]。そして背後には文字が描きこまれた板が配置され、両隣には赤い背景に一人ずつ童女が描かれている。ビザンツの祭壇画を東アジアで描いていればこのような絵画になるのではないと思わせるような、不思議な描写である。木彫と絵画を破綻なく組み合わせたこの作品は、祭壇のような空間をつくりだしている。この作品では松村作品には珍しくタイトルが名詞や漢字の組み合わせではなく他動詞で《仰ぐ》となっている。では、誰が何を「仰ぐ」のか。それは鑑賞する我々が作者である松村とともに妻や子供たちが向かった空間を「仰ぐ」のではないだろうか。このような組み合わせの作品は、画家であり彫刻家である松村だからこそ創り出せた作品ということができるだろう。

1993年には最愛の娘・志奈子が結婚する。そして1997年には火事で降住んでいた左京区梅津徳丸町の林マンションから西京極西衣出町へと引っ越しをする [35]。この西衣出町に新居を建て孫も生まれて三世帯で暮らすようになった。1998年には画集『松村光秀作品集「姿」』が出版され、ますます個展を行うようになっていく。90年代後半から松村は、絵画と木彫を組み合わせた作品を生み出していく。木彫の技術が遺憾なく発揮されている作品群に「～函（ばこ）」と名付けられたものがある。函のなかに木彫と絵画が配置されたこの作品は《仰ぐ》（1990年）（図11）にみられるような空間を函の中に創り出している。松村は早い時期から額を自作しており、まさに松村にしか作りえない作品群といえる。この函のシリーズは《菊華ばこ》（2004）に最終的な到達地点を観ることができるが、《赤ばこ》（1997年）、《朱ばこ》（1997年）（図13）などにほとんど完成し

た形態を観ることができる。

2003年には長野県の信濃デッサン館の別館槐多庵で個展を行う。2004年、島田の助力によって念願の東京での個展を兜屋画廊で行う。2006年に沖縄の私設美術館である佐喜眞美術館で「現代の絵師 松村光秀展」を行う。さらに集大成として、2008年にはギャラリー島田で自選展と2010年にはもう一度沖縄の佐喜眞美術館で個展をおこなう。しかし、2010年の沖縄での個展以降松村は気力の衰えを感じ始めていることを島田に語っている [36]。死期を悟った松村は大作を佐喜眞美術館と信濃デッサン館へ寄贈したいと考えていた。そこでその意思を島田へ託し島田が両館へ連絡をとり作品が収蔵されることとなった。

大きな病気は一度もしたことがなかった松村であったが、2010年頃から手足の動きに異変が感じられるようになり、2011年頃に検査の結果パーキンソン病と診断される [37]。多少不自由ながら日常生活を送っていたが、2012年8月15日、食欲もなく眩暈もきついため、長女・志奈子と共に病院へ検査に行く。血液検査の数値が悪かった松村は精密検査のためそのまま入院し、8月末に悪性リンパ腫の疑いがあり手術を行うこととなるが、手術を翌日に控えた9月10日深夜に様態が急変、11日の朝に帰らぬ人となった [38]。

2. 松村光秀の制作

制作方法について

松村の制作において瞳目に値することは、平面においても立体においてもほとんど下図も描かずいきなり本番としてかきだしていたという [39]。少し線で下絵を入れているのは四角形などの幾何学的なモチーフだけである [40]。現在残っている遺品をみてもデッサンの類はなくスケッチもほとんどない [41]。平面においても立体においてもそのようにこなしてしまうことは驚きというほかない。松村は「これしかないよ」という声とともに木彫を探り出していくという [42]。《めをとカレンダー》(1984年) (図14)を近くで見ると表面は非常にフラットに塗られており、薄く仕上げられていることがわかる。しかし、《昇華》(1997年)を観ると表面の凹凸が増し絵具のマチエールを使うようになっている。このように絵具の使い方も変化していることがわかる。そして晩年の作品は色彩も中間色が多くなり穏やかな色味のなかに複雑なマチエールと色彩を表現する傾向を観ることができる。

「身」「姿」とは何か

現在分かる松村の個展のタイトルを大まかに列挙すると、「松村光秀個展」や「自選展」などを除くと「哀話展」(76年)、「おとこ・おんな展」(81年)、「おんな双紙展」(84年)、「身の表現展」(86年)、「女人四十八身展」(90年)、「身の態展」(92年)、「身の態展」(93年)、「身の表現展」(95年)、「身の態展」(99年)、「身 姿展」(01年)、「姿展」(01年)、「身の彩展」(二ヶ所) (02年)、「身の遊展」(03年)、「菊華展」(04年)、「松村光秀の部屋展」(05年)、「軀・姿展」(06年)、「華函展」(07年)、「姿のかたち展」(10年)、などとなる。そして1987年ごろに自費出版した画集のタイトルが『身の表現』、1998年に出版した画集のタイトルが「姿」である。一見して「身」や「姿」という語が多用されて

いることがわかる。なぜ松村はここまで身や姿へ固執するのだろうか。この「身」は島田によると「松村の「身」は出生や家庭、その後の事故など筆舌に尽くしがたい過去の辛苦を表すとともに、「身を晒し」「身をなげだして生きる」という覚悟の表明」であるという [43]。また松村は「姿」について「女の示唆憂傷する姿が最も姿態に富む」と言っている [44]。松村にとっての「身」や「姿」は、ここでは身振り＝絵画内容になるという図式がある。松村作品にある「演劇的な」姿態はそのまま絵画内容を表出する作者の「もだえ」の表出であるということができる。また、このフォルムへの視線は、ひたすら凝視し続けてきた画家の内面の表現でもある。そのため写実的であるということに視点が置かれているわけではなく、ひたすら作家の内面世界にとってのリアリティーある形態を執拗に描写していく。そのような画家の内面で培養された観念の世界が、観るものに異様な感銘とリアリティーをあたえている。この観念の内と外を繋ぎ表すものが「身振り」ということができる。そのため「身の表現」とは松村にとっての作品のこたなのである。

おわりに

1998年2月19日の『朝日新聞』で松村は「人の心の奥底を描きたい」と語っている [45]。76年の「哀話展」という語にみられるように一貫して人間の哀しみへ視線が注がれていることがわかる。本論では2000年以降の作品にほとんど触れることができなかったが、「菊華展」という言葉にみられるように華が香る穏やかな作品が観られる。そして菊は死者へたむける華でもある。2002年9月5日の『毎日新聞』で松村は《天地》(2002年)(図12)に描かれたモチーフについて「従来引きずっているものを凝縮させた結果」と語っている [46]。何度も妻と子供たちを描き続けることによって松村はようやく《天地》(2002年)(図12)に観られるような境地にたどりついたのである。

松村の作品を観ると、理解を拒絶しながらも反対にどこまでも共感を求めるような矛盾をかかえ、制作している一人の画家と出会うことができる。松村の生涯と作品を追っていくことを通して、一人の画家が絵を描くという行為のなかで人間の心のありようを切実に問うている姿が浮かびあがる。それは、観るものに絵を描くことの意味を考えさせるものでもある。その作品は島田のいう「身を晒し」「身をなげだして生きる」という言葉のままに、冷徹に自身の内面を凝視している [47]。この凝視された観念世界はファンタジーという言葉では片付けられないリアリティーがある。観るものに現実を写実的に描くこと以上のリアリティーをあたえる。また、文字と具象の並列や、額や板絵の細部に付けられた装飾品など、松村のポリフォニックな画面構成は、立体との融合というより複合的な表現へと結実していく。個々の作品や要素、制作について、概要程度にしか挙げるができなかったが、また別の機会に詳しく論じていきたい。

謝辞

本論を執筆するにあたり、ギャラリー島田の島田誠様ならびにスタッフの皆様、そして故・松村光秀先生のご息女、本島志奈子様に多大なる御協力を賜った。また、査読の先生にご教授をいただ

いた。ここに心より御礼申し上げたい。

註

1. 島田誠他編、『松村光秀作品集「姿」』、光琳社、1998。小倉忠夫による解説に「油絵の具を使いながらも、彼の絵は少しも西洋画ではなく、全くの東洋画だからである。本質的な問題は画材の相異ではなく、画家自身の内面的オリジナリティと絵画表現自体の特性にあることを、松村光秀はその画業によって実証したといつてよからう」（93頁）とある。
2. 「松村光秀の世界展」、(2001年11月1日～12月28日)、Private GALLERY 青山のDMに「略奪」(1976年)の前で「わかりますか」、「わかります」との会話を交わしたがそれだけで十分であった」と書かれている。また2019年8月17日に筆者が島田誠氏に行ったインタビューでも松村が作品について語らないことが言われた。
3. 島田誠、『絵に生きる 絵を生きる 五人の作家の力』、26頁、風来舎、2011。「『絵師』は「宮中おかかえの絵描き」という意味だが、もちろん松村光秀は誰にも抱えられていない。それどころか自立孤絶の画家である。しかし、天才的な筆力、独創的な発想は、現代の絵師と呼ぶのがふさわしい」。
4. 島田誠、前掲書、11頁。
5. 島田誠、前掲書、14頁。
6. 島田誠、前掲書、15頁。
7. 島田誠、前掲書、12頁。
8. 筆者が島田誠に2019年8月17日に行ったインタビューによる。
9. 『松村光秀作品集「姿」』、96頁の略歴および、「一松村光秀一身の態展」、(1999年10月2日～10月8日)、海文堂ギャラリーでは1936年生まれとなっているが、直後の「松村光秀展」、(1999年10月25日～11月14日)、SHOMEIDO GALLERYの略歴表記以降は1937年生まれとなっている。この間の事情に関しては、松村の長女・本島志奈子氏によると、帰化するにあたり戸籍を取り寄せた際に1937年であったことが分かったという。
10. 「松村光秀絵画展」、(1965年10月28日～11月1日)、朝日会館ホールのDMにはMitsuhide Matsumuraと書かれている。長女・志奈子によると1989年(平成元年)前後にコウシュウという読みに統一したという。
11. 『松村光秀作品集「姿」』、96頁の略歴に1963年初個展、都雅画廊とあるが、『京都新聞』(註13)の記事にあるように都雅画廊での個展は1966年が初めてだと思われる。なお前述の略歴では1966年の個展はギャラリー紅となっているが、こちらが都雅画廊であると思われる。
12. 島田誠、前掲書、15頁。
13. 『京都新聞』、1966年5月7日、朝刊、7頁。
14. 島田誠、前掲書、16頁。
15. グループ展や団体展については『松村光秀作品集「姿」』と「第一回明日への具象展」の図録の略歴によるが、展覧会の詳細について不明なものや年代のずれについては適宜修正を加えた。
16. 二科会100周年記念事業委員会編、『二科100年史-100年の歴史と現在-』、二科会、2015、121頁に1972年会友推挙、1976年二科金賞、1978年会員推挙、1988年会員努力賞、1989年4月25日退会となっている。
17. 李恢成、『帖をうつ女』、5～45頁、文藝春秋、1977。初出は1971年の『季刊芸術』。
18. 島田誠、前掲書、22頁。
19. 李恢成、前掲書、23頁。
20. 『松村光秀作品集「姿」』、48頁。
21. 島田誠、前掲書、12頁。
22. 海文堂ギャラリーで1998年に開催された「作品集出版記念展」でつくられた冊子に、神戸市立博物館学芸員・岡泰正が「なんじ人、けなげなる生き物たちよ」と題し寄稿した文章。
23. 註22参照。
24. 註22の岡が寄稿した文章のなかで「南画風、あるいは中世の絵巻から抜け出したような東洋的なモチーフでさえ、画面から立体的に立ち上がってくるようなおもむきがある。そうした印象が強い作品では、人物像は超自然的な光が照射された舞台でポーズをとる訓練された前衛舞蹈家、あるいはドーミエのように戯画化されたパペットのように映る。画面に書き込まれた文字や金地は舞台装置のように見えてくる」とも書かれている。
25. 筆者が2019年8月17日に島田誠に行ったインタビューによる。
26. 略歴については註15、二科会については註16参照。「第一回明日への具象展」は1979年2月～4月にかけて東京(日本橋

- 高島屋)、名古屋(名古屋丸栄)、大阪(なんば高島屋)、京都(四条高島屋)、横浜(横浜高島屋)で行われた。松村は《身之鈴》を出品。
27. 島田誠、前掲書、17 頁。
28. 島田誠、前掲書、19 頁。
29. 窪島誠一郎、『私の母子像』、11 頁、清流出版、2008。
30. 註 1 参照。プロデューサーは島田誠。アート・ディレクターは大橋信雄、アシスタントは城ヶ峰淑子・佐野玉緒・澄川桂子、企画は海文堂ギャラリーとなっている。
31. 註 16 参照。二科会退会の原因については長女・志奈子による。
32. 古賀好之、「展評京都」『三彩』、109 頁、1990 年 12 月号、三彩社、1990。
33. 筆者が 2019 年 8 月 17 日に島田に行ったインタビューによる。《涅槃横華像》について、2002 年 9 月 5 日の『毎日新聞』、大阪夕刊で松村は「『天地』を制作する過程で、必然的に作った」(3 頁)と語っている。
34. 註 22 の岡が寄稿した文章のなかで「それは松村氏が探り出す彫像のように、木が形を変えて人になる。あるいは人が形を変えて木になる、という造形に通じるものでもある。メタモルフォーズ、これが松村氏の創造の重要な部分をしめているように思える。濃密な細部をもつ人物が寄り合って別の形をつくり、そこから別種の熱っぽい表現性が生まれ出てくる」とも書かれている。
35. 長女、志奈子による。
36. 島田誠、前掲書、44 頁。
37. 長女・志奈子による。
38. 長女・志奈子による。
39. 筆者が 2019 年 8 月 17 日に島田誠に行ったインタビューによる。
40. 《めをとカレンダー》(1984 年)を真近で観ると正面の正方形に鉛筆で下絵を描いていることが確認できる。
41. ギャラリー島田に保管されていた遺品を 2019 年に見たがスケッチの類はほとんど確認できなかった。
42. 島田誠、前掲書、28 頁。
43. 島田誠、前掲書、21 頁。
44. 島田誠、前掲書、27 頁。
45. 『朝日新聞』、1998 年 2 月 19 日、朝刊、兵庫面。
46. 註 33 参照。
47. 註 43 参照。

参考文献

- 窪島誠一郎、『私の母子像』、清流出版、2008
- 島田誠他編、『松村光秀作品集「姿」』、光琳社出版、1998
- 島田誠、『絵に生きる 絵を生きる 五人の作家の力』、風来舎、2011
- 二科会 100 周年記念事業委員会編、『二科 100 年史・100 年の歴史と現在』、二科会、2015
- 松村光秀、『身の表現』、便利堂、出版年不詳
- 李恢成、『砧をうつ女』、文藝春秋、1977
- 雑誌
- 古賀好之、「展評京都」『三彩』、109 頁、1990 年 12 月号、三彩社
- 図録
- 『第 1 回 明日への具象展』、日動出版、1979

図版



図1 松村光秀、2005年。竹松画房時代の友人らとの中国旅行にて / 本島志奈子氏より拝借

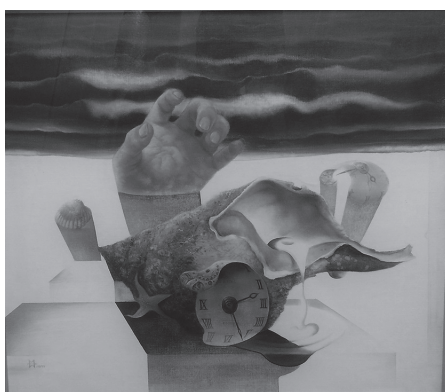


図2 松村光秀、《海辺の記録》、1970年、キャンバス・油彩、455 × 530mm、ギャラリー島田蔵 / 筆者撮影



図3 1970年、3月10日
『京都新聞』、夕刊、「現代のことば」のカット絵



図4 1976年、6月16日
『京都新聞』、夕刊、「現代のことば」のカット絵



図5 松村光秀、《身勢打鈴Ⅰ》、1973年、キャンバス・油彩、彫刻の森美術館蔵
出典：『松村光秀作品集「姿」』、島田誠他編、光琳社、1998年



図6 松村光秀、《身勢打鈴》、1977年頃、出典：『松村光秀作品集「姿」』、島田誠他編、光琳社、1998年



図7 松村光秀、《身之鈴》、1978年、キャンバス・油彩、1620 × 1120mm
出典：『第1回 明日への具象展』、日動出版、1979年



図8 松村光秀、《なわ、とんで》、1980年、キャンバス・油彩、1620 × 1303mm
出典：『松村光秀作品集「姿」』、島田誠他編、光琳社、1998年



図9 松村光秀、《華渡》、1997年、板・油彩、1200×900mm、
出典：『松村光秀作品集「姿」』、
島田誠他編、光琳社、1998年

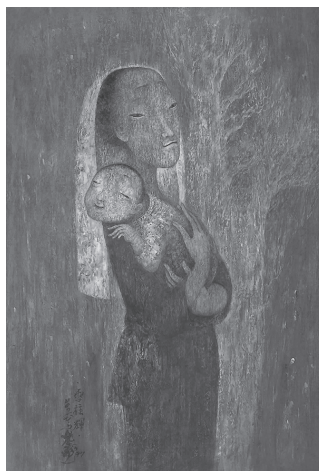


図10 松村光秀、《雪・柱・輝》、1997年、板・油彩、信濃デッサン館蔵、
495×360mm
出典：窪島誠一郎、『私の母子像』、
清流出版、2008年



図11 松村光秀、《仰ぐ》、1990年、板・油彩、木彫、1400×2000mm
出典：『松村光秀作品集「姿」』、
島田誠他編、光琳社、1998年



図12 図のように前後に配置して展示されていた。
手前が《涅槃横華像》、奥が《天地》
松村光秀、《天地》、2002年、1820×4500mm
松村光秀、《涅槃横臥像》、2002年、
410×410×150mm
出典：「まつむら光秀展」、(2002・10・8~13)、
ギャラリー三条でのDM



図13 松村光秀、《朱ばこ》、1997年、木彫・油彩、540×1120×140mm
出典：『松村光秀作品集「姿」』、
島田誠他編、光琳社、1998年



図14 松村光秀、《めをとカレンダー》、1984年、板・油彩、1500×900mm
出典：『松村光秀作品集「姿」』、
島田誠他編、光琳社、1998年

年譜

西暦	和歴	年齢	出来事
1937年	昭和12年	0歳	10月2日 父・李義男 母・河貞順の長男として京都市中京区壬生下満町に生まれる。本名は李光秀（イ・カンス）。
1940年	昭和15年	3歳	弟・光泰が生まれる。
1943年	昭和18年	6歳	家庭内の不和により母親が韓国へ帰る。
1946年	昭和21年	9歳	12月6日 母親が逝去。(享年31歳)
1948年	昭和23年	11歳	小学校5・6年生 福井県丹生群（現在の越前町）へ1年間疎開する。
1950年	昭和25年	13歳	松原中学校へ入学。
1953年	昭和28年	16歳	中学卒業後しばらくして干物乾物屋の二階へ三年間下宿する。看板屋、竹松画房で働きはじめる。
1959年	昭和34年	22歳	下鴨の写真館の二階へ三年間下宿。竹松画房で22、3歳から絵を任されるようになる。この頃、松村をかわいがった祖母、漢竹が死去する。
1961年	昭和36年	24歳	「13回京展」へ出品し入選する。この頃、左京区下鴨北山町に住んでいたか。
1962年	昭和37年	25歳	「第47回二科展」へ出品し入選する。「14回京展」へも出品し入選する。竹松画房を辞め、絵で生きていくことに決める。
1963年	昭和38年	26歳	初個展。「第48回二科展」で、京都新聞社賞受賞か。
1964年	昭和39年	27歳	お見合いで出会った西原賢子（23歳）と結婚。 左京区松ヶ崎正田町の借家に住む。
1965年	昭和40年	28歳	「松村光秀展」、(10・28~11・1)、を朝日会館ホールで開催。
1966年	昭和41年	29歳	「松村光秀個展」、(5・2~5・8)、を都雅画廊で開催。
1967年	昭和42年	30歳	長男・秀志、生まれる。
1969年	昭和44年	32歳	長女・志奈子、生まれる。
1972年	昭和47年	35歳	双子の次女三女・維志子、総志子、生まれる。二科会、会友推挙。関西二科賞受賞か。
1973年	昭和48年	36歳	「第58回二科展」出品作品《身勢打鈴Ⅰ》が彫刻の森美術館に買い上げられる。
1974年	昭和49年	37歳	「26回京展」で《舞う打鈴》が紫賞受賞。
1975年	昭和50年	38歳	「第1回洋画版画展」出品か。「関西二科展」で10周年記念大賞受賞か。
1976年	昭和51年	39歳	「松村光秀 哀話展」、(4・5~4・11)、をギャラリー紅（京都）で開催。「第20回シェル美術賞」で《しんせいたりよん》が三等を受賞か。「第61回二科展」で《身勢打鈴》が二科金賞を受賞する。
1977年	昭和52年	40歳	個展をギャラリーヤエス（東京）で開催。「第13回現代日本美術展」へ出品。
1978年	昭和53年	41歳	買い取った借家を売り軒家を買う。二科会、会員推挙。
1979年	昭和54年	42歳	「第1回明日への具象展」出品。5月11日 火事により妻・賢子（38歳）長男・秀志（13歳）次女、三女・維志子（6歳）総志子（6歳）を失う。長女・志奈子（10歳）のみ助かる。しばらく弟の家へ身を寄せる。その後、左京区梅津丸町の林マンションへ移る。「第64回二科展」へ《折りつる》を出品する。
1980年	昭和55年	43歳	「関西二科展」へ《なわ・とんで》を出品。
1981年	昭和56年	44歳	「《おとこ・おんな》展」をギャラリー紅（京都）で開催。
1983年	昭和58年	46歳	個展・ギャラリー紅（京都）
1984年	昭和59年	47歳	「おんな双紙展 松村光秀」、(11・13~11・25)、をギャラリー紅（京都）で開催。
1985年	昭和60年	48歳	開廊2周年記念企画展として「《油彩による板絵》松村光秀展」、(1・15~1・20)、をギャラリー三条（京都）で開催。
1986年	昭和61年	49歳	「身の表現展—松村光秀—」(7・4~7・16)、をABCギャラリー（大阪）で開催。「第1回川端龍子賞展」へ出品。
1987年	昭和62年	50歳	墓参団にくわわり韓国の母親の墓へ行く。この頃自費出版の画集『身の表現』を出版か。
1988年	昭和63年	51歳	「第73回二科展」で会員努力賞受賞。
1989年	平成元年	52歳	個展・海文堂ギャラリー（神戸）、「現代京都の美術・工芸」展、京都文化博物館（京都）へ出品か。この頃に、雅号であるコウシュウという音読の読みへ公式書類も変更する。4月25日、二科会を退会する。
1990年	平成2年	53歳	「女四十八身展—松村光秀—」、(10・16~10・28)、をギャラリー紅（京都）で開催。
1992年	平成4年	55歳	「9月・身の態展」、をABCギャラリー（大阪）で開催。個展・ギャラリー三条（京都）
1993年	平成3年	56歳	「松村光秀展」、(9・21~9・26)、をギャラリー三条（京都）で開催。「—松村光秀—身の態展」、(10・2~10・8)、を海文堂ギャラリー（神戸）で開催。長女・志奈子が結婚する。
1995年	平成7年	58歳	落語家桂歌之助独演会と同時開催で「松村光秀 絵画 身の表現展」、(1・14)、をE A S Y A L L（滋賀）で開催。
1996年	平成8年	59歳	「松村光秀展—絵画・彫刻—」、(9・24~9・29)、をギャラリー中井（京都）で開催。「松村光秀個展」、(10・8~10・20)を海文堂ギャラリー（神戸）で開催。
1997年	平成9年	60歳	西京極 西衣町へ移る。
1998年	平成10年	61歳	画集『松村光秀作品集「姿」』を光琳社出版より出版する。「松村光秀—作品集出版記念—」、(2・11~3・1)、を海文堂ギャラリー（神戸）で開催。「姿—作品集出版記念—まつむら光秀展」、(3・10~3・22)、をギャラリー三条で開催。
1999年	平成11年	62歳	「松村光秀展」、(3・9~3・19)、を海文堂ギャラリー（神戸）で開催。「—松村光秀—身の態展」、(10・2~10・8)、を海文堂ギャラリー（神戸）で開催。「松村光秀展」、(10・25~11・14)を松明堂ギャラリー（東京）で開催。
2000年	平成12年	63歳	「松村光秀個展」、(2・19~3・3)、を海文堂ギャラリー（神戸）で開催。「絵画と木彫 松村光秀展」、(9・4~9・10)、をギャラリー凌霄（京都）で開催。「松村光秀展」、(10・2~10・16)をギャラリー歩歩琳堂（神戸）で開催。
2001年	平成13年	64歳	「まつむら光秀 身 姿展」、(5・25~6・3)、をギャラリー三条（京都）で開催。「絵画と木彫 松村光秀 姿」、(10・17~10・23)を和貴宮神社（京都）で開催。「松村光秀の世界展」、(11・1~12・28)、をPrivateGALLERY 青山（神戸）で開催。
2002年	平成14年	65歳	「松村光秀個展<身の彩>」、(8・31~9・12)、をギャラリー島田（神戸）で開催。「—身の彩—まつむら光秀展」、(10・8~10・13)、をギャラリー三条で開催。
2003年	平成15年	66歳	「異色の現代作家たち 松村光秀 蔡国華 村上肥出夫」、(3・29~6・1)、梅野絵画記念館（長野）へ出品。「松村光秀展」、(6・28~7・21)、を信濃デッサン館 別館桃多庵（長野）で開催。「松村光秀—身の遊—」、(10・1~10・13)をギャラリー島田（神戸）で開催。
2004年	平成16年	67歳	「松村光秀菊華展」、(9・28~10・14)、をギャラリー島田（神戸）で開催。このころ父、義男が逝去か。11月、個展・兜屋画廊（東京）
2005年	平成17年	68歳	「松村光秀の部屋」、(4・29~5・17)、をギャラリー島田 deux（神戸）で開催。竹松画房の友人らと中国へ旅行する。
2006年	平成18年	69歳	「松村光秀「軀・姿」展」、(4・15~4・26)、をギャラリー島田（神戸）で開催。「現代の絵師 松村光秀展」、(12・27~2007・2・12)を佐喜眞美術館（沖縄）で開催。
2007年	平成19年	70歳	法然院（京都）講堂で開催された「法然院廊下古材に描かれた作品展」、(3・12~3・18)へ出品する。「松村光秀展 華画」、(10・13~10・24)、をギャラリー島田（神戸）で開催。
2008年	平成20年	71歳	「松村光秀 個展」、(9・3~10・7)、を高宮画廊（大阪）で開催。ギャラリー島田三十周年記念「現代の絵師・松村光秀自選展」、(11・1~11・12)、をギャラリー島田（神戸）で開催。
2010年	平成22年	73歳	「松村光秀の世界展」、(1・8~3・25)、を神戸わたくし美術館（神戸）で開催。「松村光秀展—姿のかたち—」、(5・29~6・9)、をギャラリー島田（神戸）で開催。「現代の絵師 松村光秀展」、(8・25~10・11)、を佐喜眞美術館（沖縄）開催。
2011年	平成23年	74歳	「松村光秀 自選展」、(10・11~10・18)、を枝香庵（東京）で開催。
2012年	平成24年		死期を悟り島田誠を通して大作を信濃デッサン館・佐喜眞美術館へと寄贈する意思を伝える。9月11日 逝去。「<謎の絵師>松村光秀を偲ぶ展」、(12・15~2013・2・4)、を信濃デッサン館 別館桃多庵（長野）で開催。